

平成 27 年度高松赤十字病院医学会

日時 平成 27 年 10 月 3 日 (土) 13 時 15 分～17 時 30 分

場所 香川県社会福祉総合センター 1 階コミュニティーホール

一般演題

(1) 緩和ケア研修会に対する当院の現状と課題

がん患者サポートチーム

○林 章人, 酒井智子, 木村友美
大浦真奈美, 糸瀬未来子, 多田奈津美
中尾 都, 島津昌代, 柴峠光成

がん診療連携拠点病院の指定要件として、緩和ケア研修会を定期的実施することが明示されている。また、がん診療連携拠点病院に属するがん診療にかかわる全ての医師が平成 29 年 6 月までに緩和ケア研修会を修了できるよう、拠点病院に対し計画書の提出と、計画の履行が求められている。今回、緩和ケア研修会に対する当院の現状と今までの取り組み、これからの課題などについて緩和ケア研修会の概要とともに報告する。

(2) 前立腺癌における MRI の局在診断の有用性について：前立腺全摘標本との比較

泌尿器科

○三宅毅志, 佐々木雄太郎, 泉 和良
由良健太郎, 岸本大輝, 山中正人, 川西泰夫

前立腺癌の局在診断における MRI の精度を評価するために、前立腺生検前に施行した MRI 所見と前立腺全摘標本とを比較検討した。2014 年 6 月から 2015 年 5 月までに、生検前に MRI を撮像し、RARP (ロボット支援前立腺全摘除術) を施行した 50 例を対象とした。前立腺を 10 領域に区分し、MRI と RARP における癌の局在を比較した。前立腺癌検出の感度・特異度・陽性的中率・陰性的中率はそれぞれ 35.3%、89.0%、71.3%、64.0%であった。MRI は前立腺癌の局在診断にお

いて補助的な役割を担うと考えられた。

(3) 当院におけるロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術の現状

泌尿器科

○泉 和良

当院において 2013 年 7 月よりロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術が開始されました。

2015 年 8 月までにロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術が 223 例に施行されました。この手術において重要なことは、癌の根治性と術後 QOL です。癌の根治性に関わる切除断端陽性率と、術後 QOL にもっとも関わる尿禁制について、これまでの経験をもとに考察、報告します。

(4) 下血を契機に術前診断し得た空腸 GIST の 1 例

初期臨床研修医¹⁾, 消化器内科²⁾○池内寛昌¹⁾, 久保敦司²⁾, 玉置敬之²⁾

【症例】71 歳、女性【主訴】下血【現病歴】20XX 年 6 月にふらつきと血便を認め、消化管出血の疑いで紹介搬送となった。【入院後経過】腹部造影 CT で Treitz 靱帯やや肛門側の小腸に、早期濃染し wash out する腫瘍性病変を認めた。小腸内視鏡では、粘膜に露出した粘膜下腫瘍からの出血を認め内視鏡的に止血した。生検で空腸 GIST の確定診断となり、空腸切除術を施行した。【考察】内視鏡による止血とともに術前に診断し得た空腸 GIST という点で希少な症例であった。

(5) 当科における非閉塞性腸間膜虚血症 (non-occlusive mesenteric ischemia ; NOMI) の治療戦略について

消化器外科

○三木明寛, 大谷 剛, 南 貴人
鈴木貴久, 北村好史, 石川順英, 西平友彦

非閉塞性腸間膜虚血症 (NOMI) は腸間膜血管の攣縮などにより腸管虚血から壊死に至る疾患である。死亡率は70~100%と高く治療戦略の工夫が検討されている。今回、2015年1月から9月までに当科で手術施行したNOMI 7例を検討した。死亡例は4例 (57%) であったが、上腸間膜動脈カテーテル挿入による選択的血管拡張薬動注療法と開腹のままベッドサイドでsecond lookを行った2例はいずれも救命でき有効な治療戦略と考えられた。

(6) 動画で見る気胸に対する胸腔鏡下手術

胸部・乳腺外科

○監崎孝一郎, 古川尊子, 法村尚子
環 正文, 三浦一真

【はじめに】当科では、約25例/年の胸腔鏡を用いた気胸手術が行われている。今回、動画を用いた手術手技を解説する。

【手技1】肺嚢胞を自動縫合器で切除【手技2】病変部をPGAシートで補強【手技3】病変部をフィブリン糊で塗布【手技4】肺嚢胞をソフト凝固で焼灼【手技5】病変部の縫合縫縮【手技6】肺嚢胞内にPGAシートの挿入【手技7】壁側胸膜の擦過

【考察】約1時間程度の低侵襲手術であり、癒着や肺コンプライアンスの程度によって上記手技を組み合わせる手術を行っている。

(7) 「看護ケア—私の得意な技術教えます」研修の現状と課題

看護部

○平田友子

平成19年4月に「赤十字医療施設におけるキャリア開発ラダー」が導入された。当院ではレベルⅢの必修研修として「看護ケア—私の得意な技術

教えます—」を開発した。看護師として身につけていくべき、エビデンスに基づいた行為とプレゼンテーション能力に関連し、看護実践家としての成長を支援する研修でもある。

平成27年度までに、55テーマ、58名が履修した。履修者の48% (28名) がナレッジワーカーの認定証を獲得している。

今回は、この研修の現状と今後の課題を報告する。

(8) 誤嚥性肺炎看護プログラムを試行して

南4病棟

○藤川啓子

超高齢化社会の現状では、死亡原因の肺炎が第3位となり、その中でも高齢者では大半が誤嚥性肺炎である。この誤嚥性肺炎に着目し、チーム医療の強化と看護ケアの質向上を目的として誤嚥性肺炎看護プログラムを作成した。平成26年度より試用開始し、他職種とのチーム医療や嚥下回復プロジェクトとの協働も図れ、平成26年度は40例を経験した。今後、他病棟での運用や退院後の継続したケアを目指し、この取り組みと今後の課題について報告する。

(9) 外来化学療法室における抗がん剤の安全な投与管理

外来化学療法室

○岸下礼子, 戸井恭子, 岡野愛子
穴吹いづみ, 和泉洋一郎

最近の医療現場において、チーム医療の推進による安心・安全な医療の提供が強く求められ、医師の業務軽減を目的とした看護師の役割拡大について論議されている。その中で外来化学療法室では末梢静脈と皮下埋め込み式ポートの穿刺から抜針までの抗がん剤の投与管理を看護師が行っている。血管外漏出やアレルギー出現時にも医師・薬剤師と連携をとりながら重症化させることなく安全に対応している。そこで看護師による投与管理に至った経緯・導入方法・利点・今後の課題について報告する。

(10) 苦痛のスクリーニングに基づいた緩和ケアラウンドの効果と課題

がん患者サポートチーム

○酒井智子, 大浦真奈美, 糸瀬未来子
多田奈津美, 木村友美, 中尾 都
島津昌代, 林 章人, 柴峠光成

がん診療連携拠点病院の指定要件により、がん患者の全人的苦痛に対してスクリーニングを行うことが求められている。当院でもがん患者の入院時に病棟看護師による STAS-J 症状版を用いたスクリーニングと、そのスクリーニングを基に緩和ケアラウンドを週1回実施し、スクリーニングの見直しと緩和ケア介入が必要な患者の抽出を行っている。

今回、スクリーニングに基づいた緩和ケアラウンドの効果を把握するためにスクリーニングを導入している病棟に勤務する看護師に対しアンケート調査と緩和ケア依頼の状況を調査した。その結果、今後の課題としての取り組みの示唆を得たので報告する。

(11) 看護部における地域社会との相互交流事業について

看護部ミニ講座担当者会

○高村由香利, 松本登紀子, 松原由美
林 美紀, 牧野千鶴, 横山知子
安部紗織, 牧野 愛

看護部では、健康の保持増進・疾病予防・療養生活の支援に貢献し、地域社会との相互交流を推進する目的で、平成24年7月より「看護師による知って得するミニ講座」と、平成25年度より「聞いて・知って・役立つ公開講座」を開催している。これまでにミニ講座は39回実施し、公開講座も今年12月に第3回目を企画している。今回、これまでに実施したミニ講座・公開講座の開催状況や今後の事業拡大について報告する。

(12) 「高松赤十字病院」をもっと知ってもらうために～広報活動の重要性～

総務課¹⁾, 事務部²⁾, 広報委員会副委員長³⁾,
広報委員長⁴⁾, 院長⁵⁾

○瀧 裕子¹⁾, 大倉 遥¹⁾, 國方伸二¹⁾
大林武彦¹⁾, 土居義弘²⁾, 高德敏弘²⁾
大西宏明³⁾, 池田政身⁴⁾, 網谷良一⁵⁾

高松赤十字病院事業5カ年計画（平成26年～30年度）の重点項目に挙げられているとおり、現在、当院では院外への情報発信の推進（広報の充実）を目標としている。平成27年4月には総務課に広報専任者を配置し、活動強化を図っているところである。そこで、近年実施した広報内容の報告や今後の活動目標、また病院経営における広報の重要性を紹介する。

(13) 薬剤部における休日の抗がん剤無菌調製の運用について

薬剤部

○西尾美穂, 奥野義規, 小畑雅彦
岡野愛子, 筒井信博

抗がん剤の調製時には薬剤の無菌性の確保、及び調製者の安全性の確保が求められるため、環境が整備された薬剤部における抗がん剤の調製は、患者と医療従事者双方に有益なことである。薬剤部では、平日の全ての抗がん剤の調製を行ってきたが、昨年より、休日における抗がん剤調製も薬剤部で実施することとなった。そこで、運用開始となった平成26年8月から平成27年7月までの調製件数とレジメン内容、休日の運用体制と問題点について報告する。

(14) 当院での食物アレルギーへの取り組みの現状

栄養課¹⁾, 小児科²⁾

○玉置憲子¹⁾, 高田彩加¹⁾, 太田麻里子¹⁾
碓石峰子¹⁾, 安田 泉¹⁾, 黒川有美子¹⁾
竹廣敏史²⁾

食物アレルギーへの対応の劇的な変化に伴い社会のニーズも変化し、より個別化した対応が求められている。当課では、安全性向上の為、全食材

のアレルギー項目の再確認を行うと共に、誤配膳防止のための対策を強化し、スタッフの意識向上に努めてきた。今年度は「小児食物アレルギー負荷検査」が施設基準として受理され、入院時の低アレルギー食に関しても検討を重ねている。これら取り組みの現状について報告する。

(15) 造血幹細胞移植患者に対するリハビリテーション

リハビリテーション科

○嶋田郁美, 大塚武史

造血幹細胞移植患者に対し、リハビリテーションを実施することは、患者の運動耐用能やQOLの改善が期待出来る。リハビリテーション科では、2011年より造血幹細胞移植患者に対し、移植前からの介入を行っている。これにより、患者は移植前から体力作りを行い、移植後の運動に対する意識付けも可能となっている。リハビリテーション介入時における、アセスメントや運動内容、またリスク管理などを交えて報告する。

(16) 「気になるシート」運用の現状と課題

虐待対策委員会

○葛西真樹子, 高木さやか, 鈴鹿千尋
牛尾由美子, 穴吹いづみ, 松本登紀子
井 陽輝, 高橋光彦, 幸山洋子
安藤幸代, 池田政身, 西村和修, 網谷良一

医療機関関係者は、日常業務を行う中で、虐待及びDV被害を発見しやすい立場にあることから、通報や通告、情報提供を通じて、被害児・者の早期支援につなげることを期待されている。そこで当院では、虐待及びDV被害に組織的に対応するために、昨年8月に虐待対策委員会を立ち上げ、今年5月に虐待対応マニュアルを整備した。虐待の早期発見・早期対応の手段のひとつとして「気になるシート」の運用を開始したが、運用開始以降4か月間の現状と今後の課題について報告する。

(17) 造影CTにおける副作用発生の現状

放射線科部¹⁾, 放射線科²⁾

○秋山尚人¹⁾, 中川真吾¹⁾, 森 規¹⁾
須和大輔¹⁾, 吉崎康則¹⁾, 安部一成¹⁾
金只賢治²⁾

平成25年6月から造影CT検査マニュアルを作成、運用している。また、それに伴い平成26年1月から、造影CT検査における副作用発生時には副作用カードを発行している。副作用は、軽症（喉頭不快感、くしゃみなど）、中等症（呼吸困難など）、重症（ショックなど）、重篤（心肺停止）に分類している。カードを発行し始めてから平成27年6月までの副作用発生件数及び、副作用の症状をまとめたので報告する。

(18) 当院における3TMRIを用いた前立腺癌診断の有用性

放射線科部¹⁾, 放射線科²⁾, 泌尿器科³⁾

病理診断科⁴⁾

○岡川 貢¹⁾, 石井寛人¹⁾, 土田紘子¹⁾
高木舞子¹⁾, 坂本吉伸¹⁾, 峯瀬正高¹⁾
安部一成¹⁾, 金只賢治²⁾, 佐々木雄太郎³⁾
川西泰夫³⁾, 林 俊哲⁴⁾, 神野真理⁴⁾
萩野哲朗⁴⁾

MRIは前立腺の内部構造の描出に優れており、癌病変の局在診断に有用な検査である。

昨年3TMRI装置が導入されて以降、当院において前立腺のMRI検査件数は飛躍的に増加した。今回本格稼働した昨年6月から今年5月までの1年間で前立腺MRI検査件数を調査するとともに、MRI検査を施行しその後全摘除術を行った症例を対象とし、T2WI、DWI、ADC mapの前立腺癌診断における有用性について全摘術後標本と対比して検討を行った。

(19) 心臓超音波検査の現状

検査部生理検査課¹⁾, 超音波診療センター²⁾

○高田益史¹⁾, 池田都志子¹⁾, 加藤優佳¹⁾
坂東由花¹⁾, 村川佳子¹⁾, 日野賢志¹⁾
宮崎朋美¹⁾, 松原幸子¹⁾, 富野和江¹⁾
木太秀行¹⁾, 高杉淑子¹⁾, 丸山哲夫²⁾

検査部生理検査課は、2014年7月から案内表示板による患者誘導システムを導入し、円滑に業務を行えるようになった。今年4月には超音波診療センターが設立され、心臓超音波の依頼件数も上昇傾向である。今後も様々な診療科の先生方からの依頼を受けるべく、そのシステムと、オーダーについて紹介させて頂く。更に、件数増加を見込んでの時間枠の確保や、技師の育成・技術向上への取り組みについて報告する。

(20) 当院におけるカプセル内視鏡検査と読影の現状

内視鏡室¹⁾, 消化器内科²⁾

○綾木雅佳¹⁾, 三野さとみ¹⁾, 大塚美和子¹⁾
嶋田洋子¹⁾, 中谷浩子¹⁾, 藤井美智代¹⁾
松中寿浩²⁾, 柴峠光成²⁾

当院では、2010年11月に小腸カプセル内視鏡検査（以下CE）を導入し、2015年8月までに70件行ってきた。内視鏡技師（以下技師）は主にCEの準備や画像のダウンロードなど検査の一連の流れを担当し、医師が読影、診断、レポート作成を行っていた。CEの増加や医師の負担軽減を目的として、2013年10月から技師1名が読影に関わるようになった。今回、当院におけるカプセル内視鏡検査と読影の現状について報告する。

(21) 透析患者の冠動脈病変に対するロータブレーターの現状

医療機器管理課

○別府政則, 土手添勇太, 木村竜希
豊島好美, 光家 努, 松本浩伸, 土居朋枝

慢性維持透析患者において、高齢化や動脈硬化による心血管系合併症が増加している。当院では2014年5月よりロータブレーターを導入し、2015年4月までの1年間で15件のロータブレー

ターを施行した。今回は、そのうちの維持血液透析患者4名を対象とした。調査項目は、年齢、透析原疾患、透析歴、合併症の有無、冠動脈病変の病変枝数と部位を調査したので症例提示も含め報告する。

(22) ロボット支援前立腺全摘除術 200 例経験と臨床工学技士の関わり

医療機器管理課

○土手添勇太, 森長慎治, 光家 努
松本浩伸, 土居朋枝

2013年7月 da Vinci 導入当初より臨床工学技士（以下CE）が手術に立ち会い機器のセッティングや術中のトラブル時の対応を行ってきた。今回、2013年7月から2015年6月までの2年間でロボット支援前立腺全摘除術を施行した203例を対象とし、トラブル内容などCEの関わりについてまとめたので報告する。